



5月号

平成2年5月1日
発行 / 編集
岡崎市教育委員会

タン タン タン
にぎった縄に緊張が伝わり
風が生まれ 舞い上がる

後ろまわし 片足とび

交さとび あやとび 二重とび
胸を張って軽快に飛び続ける
白い波が 朝の空気の中で揺れた

波の列は だんだん小さくなつて
生まれては止まり 止まつては生まれ
新一年生の上気した顔の波が
黒い瞳になつて光つている

五月の風が まだ舞つてゐる
光の渦がさざめいて
活氣あふれる一日が始まる

（朝の自主トレ）



（跳ぶ—藤川小）

今時の子どもは礼儀を知らない、挨拶ができないと大人は言う。でもこの子は、「ありがとうございました。」と挨拶ができた。

岡崎子どもバスケットボール教室のチームが第三回全国ミニバスケットボール大会に優勝しての帰途、新幹線の中で、

「今年優勝したから、来年は僕たち、推薦で全国大会に出場できるんですか。」「予選で負けたら優勝カップはどうする」

「今年優勝したから、来年は僕たち、推薦で全国大会に出場できるんですか。」「予選で負けたら優勝カップはどうする」



一 教育隨想

ありがとうございました

矢田香子

の端で遠いのにミニバス教室に四年生から皆出席。だが、身長が一三〇cm台と低く、レギュラーには今一步で、十一人目のプレイヤーである。父は、「レギュラーになれないのならやめよ。かなわん。」N君のミニバス教室通いには大反対。(N君は母親に送り迎えをしてもらつていた)でもN君は、「待つこと三時間。父が帰宅した。N君は父の席に向かいに正座し、父が食膳につくのを待つて、「父さん、バスケットをさせてくれてあります」と感謝の言葉を真心こめて贈った。父も母も感動の涙、涙。父は、バスケットをやめろと言つたことなど忘れた顔で、「母さん、三月まで雨の日、寒い日は送つてやりなさい。」と声をつまらせる。

「絶体やめたくない。男の約束だから。雨降りでも母さん、送つてくれなくていい。バスで行くから。」

とバスケットをやさせて欲しいと頼む。と指導者に尋ねる。五年生なりに負担を感じるらしい。

「新年度、新しいチームができた。子どもたちは、予選で優勝カップを返還しよう。」

この年、岡崎子どもバスケットボール教室チームは県大会は勿論、東海大会においても優勝し、全国大会の予選にも目標を立て、男の約束をした。

このメンバーの中のN君、家は市の北

の端で遠いのにミニバス教室に四年生から皆出席。だが、身長が一三〇cm台と低く、レギュラーには今一步で、十一人目のプレイヤーである。父は、「レギュラーになれないのならやめよ。かなわん。」

「男の約束が果たせた。」と抱き合い、涙を流して喜び、指導者も夕食時になり、母親が、「父さん、今日は遅くなるから先に食べたら」

と言つてもN君は、「待つていてるよ。父さんに言いたい事があるから……」

とおもしそう

六年生の児童が、一・二年生の学級へお話を訪問した際の、子供の第一声である。

学級活動の一環として、「どろんこハリス」(江祥智作、ポプラ社)を読み聞かせた。活動する六年生の瞳も輝いている。高学年らしさを發揮しようとする意識化もよくされている。

羅針盤



静から動、動く学校図書館へ
図書館指導員 中根 洋

「わあ……、おもしろそう！」

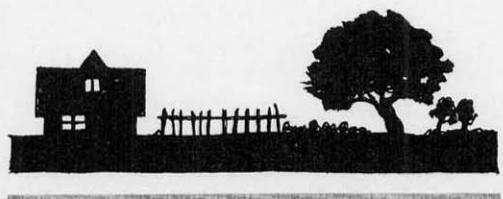
六年生の児童が、一・二年生の学級へお話を訪問した際の、子供の第一声である。

「（ジョン作、福音館書店）」ちからたろう(江祥智作、ポプラ社)を読み聞かせた。活動する六年生の瞳も輝いている。高学年らしさを發揮しようとする意識化もよくされている。

舞台装置(木枠は先生と児童の合作による。その他、小道具も準備された)、音響効果(BGM、擬音を使用)、T Pロール(つづき絵として利用)などに工夫が凝らされ、児童もお話を聞き入つてゐる。これだけの準備はとても大変だが、きちんととした過程(目的指向→意志決定→実践意欲化→実践→反省)は、指導案の計画の中に綿密な意図のもとに位置づけられている。やもすると、児童にのみ押しつけられるがちだが、教師としての

ふるさとシリーズ

この人に聞く



五万石保存会

山田 フミ 氏

「五万石でも 岡崎さまは お城下まで

船が着く」

と歌われる「五万石」、その保存、普及に努めておられる山田フミさんをお訪ねした。お住まいは、岡崎公園の北、竜城橋に近い国道一号線沿いにあり、五万石保存会会主の山田さんに似つかわしい所に位置している。

山田さんと「五万石」とのかかわりは、終戦後の益踊りが始まつたこと。四歳から十九歳まで日本舞踊を習っていた素養を見込まれ、当時、各地で行われ始めた益踊りを広めるために、市役所の講習を受けたのがこの道に入るきっかけに

なったということである。

婦人会を中心となつて、敬老会やコンクールなどでも踊つていましたが、十一年ぐらゐ続けているうちに、保存会を作ろうということになりましてね。当時、「五万石」を踊れたのは私たちくらいの年配の者で、一般の人はあまり知らなかつたんですよ。初めは、益踊りの「新五万石」の方をやつていたんですが、「正調五万石」を保存せよという声が出てきました。

「正調五万石」はとても難しく、日本舞踊の素地のない人にはなかなか踊れないそうである。現在、保存会の会員は百五十人から百六十人ほどいらっしゃるが、踊りができる人はずっと少ないとのこと。

週三回の稽古日には三十人くらいのお弟子さんが集まり、「五万石」を中心いろいろな踊りの練習をされるそうである。お弟子さんは三十代から五十代の方が多く、御主人が歌、奥様が踊りと、夫唱婦隨でやつていらつしやるところもあると言われる。

「素養のある人は上達も早くどんどん登つていくが、素養のない人は何年かかってもあまり上手になりませんね」

見ていれば、登つていく人かどうかすぐ分かるそうである。素質を見抜いてそれぞれに合つた指導をしていくことが、楽しく長く続けられる秘けつとのこと。

小さい子供を教えることもあるそうであるが、子供に教えるほど難しいことはないと言われる。

(生年月日 大正二年一月一日
住所 岡崎市康生通り西四丁目四)

「子供は、教えたことをそのまま身につけてしまふから、下手なことは成させていく、という創造的な活動を感じることができた。

早速、一年生よりお札の手紙が印刷されて届けられた。Y先生の配慮による接している私たち教師も、忘れてはならないこととお聞きした。

素人にはなかなか踊れないという「正調五万石」の難しさは、何を知らない人はその型ができる。踊りは、心で踊らなくてはいけません」と。「正調五万石」を守り続けていた誇りのこもる言葉だった。

「ハリーがきょうしつをぐるぐるまわったところがおもしろかつたよ。・ラシをふとんのしたに、かくしたところがおもしろかつたよ。・ハリー、おふろがすきになつてよかつたね。

子供らしい、様々な反応が表現されていた。これらの感想を手にした六年生も、自分たちの活動に対する反響を知ることができた。また、ここには、上学年と下学年の交流を通して、読書活動の広がりの機能が働いていることを示している。活動を終えた六年生が、満足感に浸つているように見えたのは、自分だけだったろうか。

学校図書館教育も、学級活動のみならず、多くの場で設定されていくことが望まれる。こうしたことが、子供の自ら学ぼうとする意欲化を図り、学ぶ楽しさ、たくましく生きぬく力を身につける原動力となろう。まさに、学校図書館も静かに活動へ、「動く図書館」としての可能性を秘めている。視聴覚教育との連携も含めて、実践を深めたいものだ。



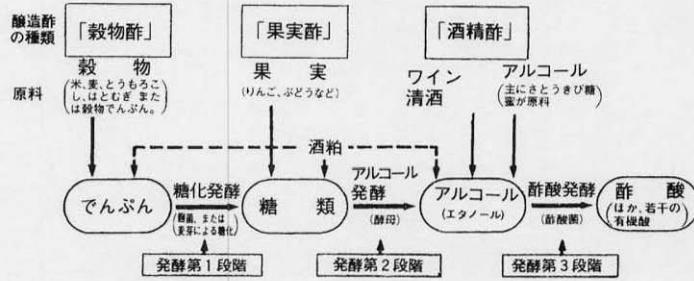
65

岡崎 醋



糖化・アルコール発酵槽
糖化発酵には麹が、アルコール発酵には酒粕が用いられる。

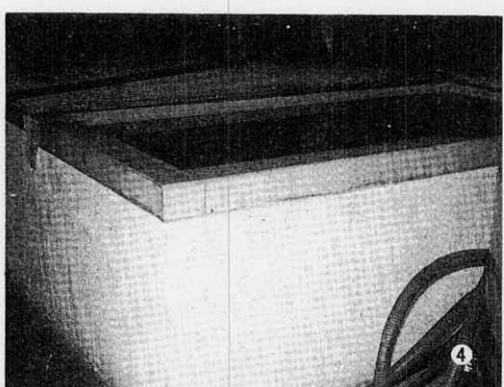
醸造酢の製法原理および原料との関係



〈資料提供：日名本町（株）川上酢店〉

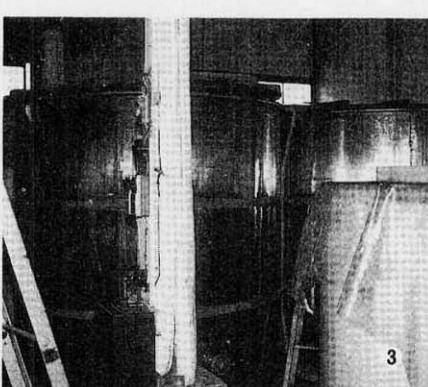


圧搾装置
食酢用もろみを圧搾し、精製する。



食酢静置発酵槽

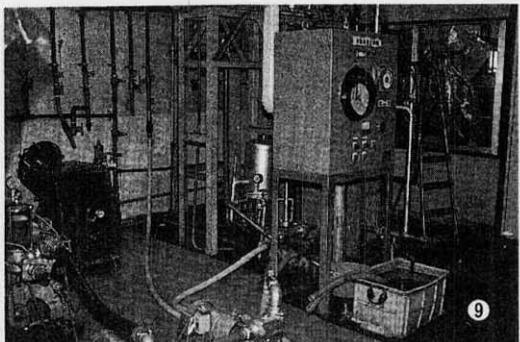
酢酸菌を増殖させる。



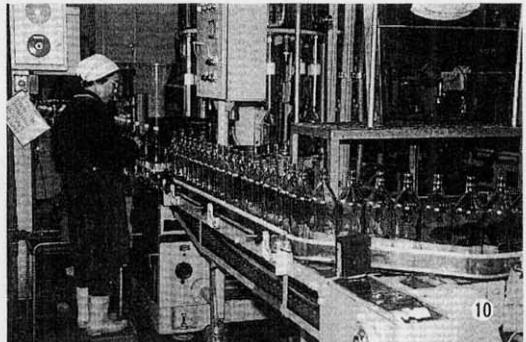
発酵液仕込槽

しづくに種酢や水を加え調合する。

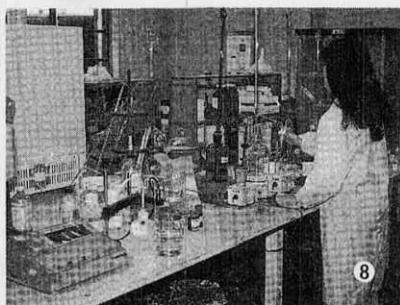
4



ろ過・殺菌装置



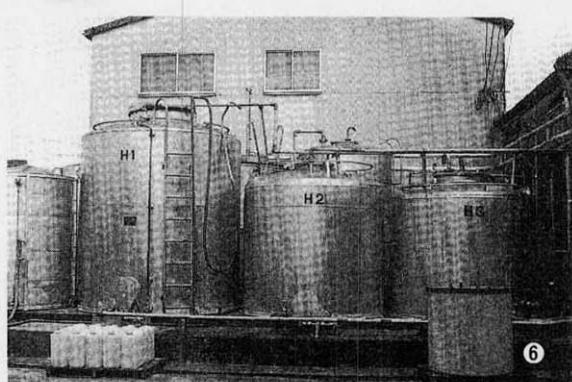
びん詰めライン



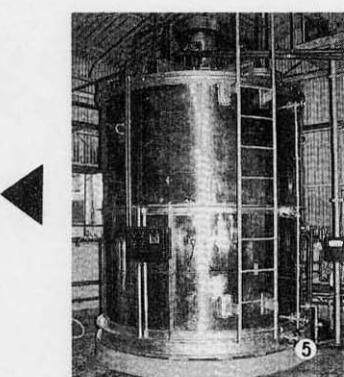
品質検査室 できた食酢の品質の検査・管理を行なう。新製品の開発研究などもこの部屋で行われる。



配合装置 食酢を調合する。



貯蔵タンク



食酢連続発酵装置

種酢を加え、温度・通気を調整された中で酢酸発酵させる。

酢は、私たちにとってなじみ深い調味料であり、いつの時代の料理にも欠かすことのできない重要な役割を果たしてきた。その起源は、「酒のあるところ、必ず酢がある」といわれるほど古く、正確には知る由もないが、我が国では弥生時代後期にはすでに利用されていたといわれている。

しかし、古い時代には、農民たちが個々に手作りしていたものであり、本格的な醸造法が成立したのは、四世紀後半に中國から和泉の国に（今の大坂府南部）その技術が伝えられたのが始まりであるといわれている。そして、酢づくりが醸造業として成り立ち、大規模に生産されるようになったのは江戸時代に入つてからのことである。

岡崎市内では、創業大正十三年という酢の醸造会社が日名本町に一社ある。同社は、今では近代的な製造ラインの設備

圧搾機でろ過し、その液に酢酸菌を多く含んだ「種酢」を入れ、温度・通気などを調整された装置で酢酸発酵をさせる。その後、タンクで二～三ヶ月熟成させ、ろ過・殺菌を経てできあがる。米酢の伝統的な製法のなかには、発酵から熟成まで一年ないし数年に及ぶものもある。

ひと昔前までは、お祭りや行楽の季節に需要の伸びが見られたが、現在では、一年を通じて大きな変化はないということが注がれている。

酢は、糖化発酵→アルコール発酵→酢酸発酵の三つの発酵段階を経て作られ、その工程は酒づくりに似ている。米酢の場合、まず、蒸米に麹と水を加え、糖化発酵とアルコール発酵をさせる。それを

小さな科学者

岡崎小 香村 敏之

理科の学習の中で見られた子供の姿である。

二年生では、春から夏にかけて、ヒマワリを育てる。私のクラスでも学級園を利用して、ヒマワリを育てた。水や肥料をやり、夏の暑い日に草取りもした。

台風で倒れるというアクシデントはあったが、ヒマワリは大きな花を咲かせ、二学期には、種を取りました。そして、種取り後の学級園では、落ちた種が、再び芽を出した。それを見つけた子供たちは、「ヒマワリ、また大きくなるかなあ。」

二年生では、春から夏にかけて、ヒマワリを育てる。私のクラスでも学級園を利用して、ヒマワリを育てた。水や肥料をやり、夏の暑い日に草取りもした。

台風で倒れるといいうアクシデントはあったが、ヒマワリは大きな花を咲かせ、二学期には、種を取りました。そして、種取り後の学級園では、落ちた種が、再び芽を出した。それを見つけた子供たちは、「ヒマワリ、また大きくなるかなあ。」

二年生では、春から夏にかけて、ヒマワリを育てる。私のクラスでも学級園を利用して、ヒマワリを育てた。水や肥料をやり、夏の暑い日に草取りもした。

台風で倒れるといいうアクシデントはあったが、ヒマワリは大きな花を咲かせ、二学期には、種を取りました。そして、種取り後の学級園では、落ちた種が、再び芽を出した。それを見つけた子供たちは、「ヒマワリ、また大きくなるかなあ。」



と、毎日、学級園へ観察に行つた。やがて、霜が降りるころになつて、ヒマワリの葉はしおれ、枯れ始めた。

「先生、やつぱりだめだよ。」

と、子供たち。そこで、学級園から植木鉢に植えかえ、教室で育ててみることにした。

教室に置かれたヒマワリは、やはり寒さのためか元気がない。

しかし、子供たちは、水や肥料をやり、少しでも日に当たるようになると、窓からさし込む日の光を気にかけ、放課ごとに植木鉢を移動した。

そして、三月。終業式の少し前、冬を越したヒマワリは、小さな花を咲かせた。

一学期、教室の水槽で魚を飼育し始めた。子供たちは、放課になると、入れかわり、水槽のぞき込んでいた。そんなある日、「魚を家から持つて来てもいいですか。」と、A夫。

「いいよ。」

と、A夫はフナを、Y子はドジョウを持って来た。しかし、よく見るとA夫のフナの尾びれの形がどうもおかしい。

「これ、黒くてフナに似てるけど、フナじやないみたいだぞ。」

私は、国語通信「ゆやゆよん」を編集し、Y君はそのファンで

と、私が言うと、A夫は、「フナだ。」

と、言い張る。ともかく育ててみることにした。

そして、三月。終業式の少し前、「水槽の魚、どうしよう。」

と私。二人は、小さなバケツを持って来た。A夫は赤い金魚を、Y子は大きくなつたドジョウを、うれしそうに持ち帰った。

Y君のこの時の注文には、はつとさせられるものがありました。これまで、生徒たちが授業中に書いた感想を載せたり、日本語の特徴を説明した文章を載せたりしてきましたが、何か一方的でした。早速、次のように記事を載せました。

「Y君より、短歌、俳句、物語などを募集したらどうかといふ進言がありました。この通信は、勉強のために出しているものですが、少しずつそういうものも入れていきたい」と思っています。今は、漢字の成り立ちの勉強をしていて、第一弾として、象形・会意などの作り方で、漢字を作つてみてください。使えそうでもしろい漢字には、ゆやゆよん大賞を贈ります。」

こうして、国語通信「ゆやゆよん」は、生徒の心をとらえ、国語学習への意欲を増し、年間百四十九号まで続きました。この中には、国語の勉強を発展させて、調べたことや、家族や近所の人から聞き取ったことなどと、学習に広がりと深まりを感じることができました。

国語通信が、私と生徒と学習を結びつける媒介となつたのだと思います。

「なるほど、これだと、椅子よりも意味がよくわかつていいね。」

結局、大賞を獲得したのはM男でした。でもY男は、嬉しそうに私のそばにやってきました。

「先生、次の企画です。聞いてくれますか?」

こうして、国語通信「ゆやゆよん」は、生徒の心をとらえ、国語学習への意欲を増し、年間百四十九号まで続きました。この中には、国語の勉強を発展させて、調べたことや、家族や近所の人から聞き取ったことなどと、学習に広がりと深まりを感じることができました。

国語通信が、私と生徒と学習を結びつける媒介となつたのだと思います。

「なるほど、これだと、椅子よりも意味がよくわかつていいね。」

教育日々



『ゆやゆよん』

とY君

城北中 内田 清

「あのう」Y君にはその後が続きました。にこにこして、こちらの出方をうかがっていました。

「先生、この字どう。つつみがまえの中に金が入っているんだけれど。」

「いいふと読むんだよ。」

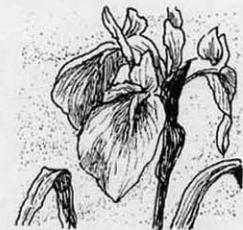
と、呼びかけました。すると多くの生徒から反応がありました。

「先生、この字どう。つつみがまえの中に金が入っているんだけれど。」

「いいふと読むんだよ。」



お知らせ



[寄贈刊行物・資料等]

◆長瀬今昔

矢作北郷土研究会

A5 一九二ページ

◆あなたの子どもは

三〇分で泳げる

ハートピア岡崎副所長

鈴木勘三 A5一三八ページ

◆学区探訪―大門学区百十話

B5 一一〇ページ澤田憲正

◆平成二年度研究発表校

%矢作北小・郷土の人・事・

物に学ぶ

%・恵田小・豊かな心とたくま

しく生きる力を育てる教育

%・梅園小(甲山中・城北中)

より豊かに―授業から広が

る歌声―(第一回全日本

合唱教育研究会・愛知・岡

崎大会)

%・梅園幼(のびのびと遊べる

子をめざして一人とかかわ

る力を育てる―

%・竜南中・個性を生かす教育

一個を生かす手だてと活動

の場を工夫した授業を求めて

つける―

%・奥殿小・基礎学力の定着―

読む、書く、計算する力を

取り入れた人間教育

%・緑丘小・感動を綴る作文教

副会長 高瀬 昭三(竜南中)

太田 泰永(甲山中)

監査 勝田 齊(矢北中)

活動する子どもの育成

庶務 磯谷 栄一(城北中)

会計 大須賀明彦(南北中)

%・矢作南小・子供の目が輝き

続ける授業の創造

%・恵田小・豊かな心とたくま

しく生きる力を育てる教育

%・梅園小(甲山中・城北中)

より豊かに―授業から広が

る歌声―(第一回全日本

合唱教育研究会・愛知・岡

崎大会)

%・梅園幼(のびのびと遊べる

子をめざして一人とかかわ

る力を育てる―

%・竜南中・個性を生かす教育

一個を生かす手だてと活動

の場を工夫した授業を求めて

つける―

%・奥殿小・基礎学力の定着―

読む、書く、計算する力を

取り入れた人間教育

%・緑丘小・感動を綴る作文教

%・大門小・自らの考えと思ひ

やりをもつて、生き生きと

活動する子どもの育成

城趾公園めぐり始まる

北中を皮切りに市内小中学生四

万人を対象に開始された。郷土

つぶさに見、理解を深めてもら

うねらいである。新しくできた

からくり時計や能楽堂、家康館、

HSTTに入気が集まっている。

岡崎の中心でもある城趾公園を

北中を皮切りに市内小中学生四

万人を対象に開始された。郷土

つぶさに見、理解を深めてもら

うねらいである。新しくできた

からくり時計や能楽堂、家康館、

HSTTに入気が集まっている。

%・大門小・自らの考えと思ひ

やりをもつて、生き生きと

活動する子どもの育成

城趾公園めぐり始まる

北中を皮切りに市内小中学生四

万人を対象に開始された。郷土

つぶさに見、理解を深めてもら

うねらいである。新しくできた

からくり時計や能楽堂、家康館、

HSTTに入気が集まっている。

岡崎の中心でもある城趾公園を

北中を皮切りに市内小中学生四

万人を対象に開始された。郷土

つぶさに見、理解を深めてもら

うねらいである。新しくできた

からくり時計や能楽堂、家康館、

HSTTに入気が集まっている。

岡崎の中心でもある城趾公園を

北中を皮切りに市内小中学生四

万人を対象に開始された。郷土

○一月二十四日(木)

童谷小学校

本宿小学校

福岡中学校

労作教育

泉

会研究研修会開催回四第

研究発表要項

株式会社常務執行役員田部類

福岡小学校



岡崎市内の研究発表会の歩みは、大正末期から昭和初期の頃に始まっている。

写真資料は、昭和九年二日間にわたる福岡小学校の第四回労作教育研究会記録の中の発表要項である。

昭和三年から取り組まれ、昭和六年に第一回の研究発表会が開かれている。講師には、玉川学園長の小原國芳先生を招き、全国から千名ほどの参加者があつた。毎年全国発表が行われ、講師も京都大学教授の小西重直先生、奈良女高師附属小の木下

竹次先生など、当時の超一流の研究者たちであった。

当時の一般的な授業形態が教師中心の一方的なものであつたのに対し、「分団學習」「協同學習」が討議法の形で行われた。

しかも、作文・図画・工作などが一緒になった「合科」として研究されていた。子供の活動が中心となつた授業が全国から注目を集めたところである。

今年も市内の十数校で各種の研究発表会が計画されている。

何十年先までも生きつづける研究でありたい。

「落とし文」という初夏の季語がある。五月から六月によく活動する虫、オトシブミからきている。葉を円筒形に卷いて作られるこの虫の巣の形が「昔、恋人に拾つてもらうために落としておいた文」に似ているので名付けられた。新緑の林を散策しながら「落とし文」を探すのも、また乙なものである。

懐かしい思いはするものの、いざ子供が使っているのを目にする、そのなんともいい加減な言葉の響きが気になる。新年度が始まつて早一ヶ月。忙しさに流され、自分の指導はあんちよこになつていられないだろうか。

酢を醸造している工場を訪問した。周辺に漂う甘酸っぱい香りは古来から伝わる、日本の味である。

穀物や果実を原料とし、その製法・醸

新緑がまばゆいばかりに美しい。紅葉と一口に言つても、木の種類によって若葉の色も実にさまざまである。風のそよぎや日に照らされて、微妙に色合いを変えていく様子には、自然の妙趣が感じられる。

多くの皆様なり風わたら

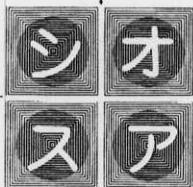
ルカリ性にして、健康増進に効果がある。この一年、酢の効かせ具合を塩梅したい。

・表紙写真
・表紙詩
・カット

井 藤 川 小

高 木 大 柿 峰 樹
木 理 人

五百木瓢亭



シ
オ
ス
ア

この本を

*吉野ヶ里遺跡

佐賀県教育委員会

吉川弘文館

¥1600

*若いやつは失礼

小林道雄

岩波ジュニア新書

¥600

*女義太夫一代

竹本素京

草思社

¥1900

*暮らしの気候学

大和田道雄

日本放送出版協会

¥670

子どもと自然

河合雅雄

岩波書店

¥520

人間を取り巻く環境は、優れて人工化が進行し、自然喪失が憂慮されている。今日の子育てや教育の諸課題も、根源には自然関係のねじれや不適応があると言えよう。本書は、サルの生態研究に基づいて育児・教育における自然の原理を追究し、学習や家族のあり方、文化創造の基本原則について示唆に富む提言をしている。一読、眼の鱗を剥がされる思いがする。教育や人間に关心を持つすべての人に必読を推奨したい書物である。